

# 平成25年度総会と 第26回 秋の詩祭 開催

開催日：平成25年月11月23日(土・祝)  
会場：前橋テルサ4階 第3会議室

## 群馬詩人クラブ

# 会報

No. 284

編集／群馬詩人クラブ幹事会  
代表／井上英明  
発行／群馬詩人クラブ事務局  
〒373-0806  
太田市龍舞町5486

印刷 三協印刷

振替番号 00160-4-708314 中澤陸士

### 主な記事

- 会計報告書・予算書……………2
- 詩祭講師・田中 武氏作品……………3  
「物語の始まり」「笹折り」「湖の家」  
「小さな土地」「賢治が見ていた」  
「雑草屋」
- 早川 聰氏追悼 狩野 務……………6
- 書評……………7  
愛敬浩一「影と飛沫」 愛敬浩一  
佐伯 圭「ゴック」 井上敬二  
片山壹晴「セザンヌの言葉」 鈴木比佐雄  
新井穎子「うしろの月」 森 郁男  
野口武久「野の道」 久保田 稔
- イベント報告……………10  
あすなろと崔華國 志村喜代子  
第18回高崎ストリートライブ 新井隆人
- 年刊詩集案内／受贈誌誌御礼……………12

### ◆ 日 程 ◆

受付 午後一時三〇分より

### 第一部 総会 (二時～二時三〇分)

議長選出

代表幹事挨拶

1号議案 平成二五年度事業報告

2号議案 平成二五年度会計報告

同監査報告

質疑応答

3号議案 平成二六年度事業計画案

4号議案 平成二六年度予算案

質疑応答

### 第二部 秋の詩祭 (二時四〇分～四時)

演題「詩のはじめ、詩の事情」

講師 田中 武氏

〈略歴〉

一九三四年新潟県北蒲原郡五十公野村(現・新発田市五十公野)に生まれる。

一九五三年一九歳頃から文章倶楽部(現代詩手帖の前身)に投稿。一九五五年に常連たちで結成された「ロシナンテ」に参加。同人に石原吉郎、粕谷栄一、小柳玲子らがいた。一九五九年「ロシナンテ」解散。

以後、個人詩誌「ゆすりか」や新潟県内の詩誌「アイ」誰「海構」辻「空の引力」などによって詩作活動をする。一九七七年から小山和郎個人編集の「紙鳶」「凧」「幫」に同氏の要請で継続的に詩作品を掲載した。

出版詩集 一九七八年「茅原忌」(自家版)

一九八六年「旅程のない場所」(紙鳶社)

二〇〇六年「驟雨の食卓」(紙鳶社)

二〇〇九年「雑草屋」(花神社)

所属詩誌「その空の下で」

「第二次・詩的現代」

所属団体

日本現代詩人会  
新潟県現代詩人会

### 第三部 懇親会 (四時～)

会場 前橋テルサ一階「オルヴィエーターナ」

会費 四〇〇〇円

★当日『群馬年刊詩集第三六集』を配布します。

★この会報は総会の資料として使用しますので、当日ご持参ください。

★受付にて会費納入を受け付けます。年会費は三千円です。

## 群馬詩人クラブ 平成25年度会計報告書・平成26年度会計予算書

平成25年度会計報告書  
(平成24年10月6日～平成25年10月5日)

平成26年度会計予算書(案)  
(平成25年10月6日～平成26年10月5日)

### ● 収 入 838,775

(単位:円)

繰越金	459,835	
会費収入	340,000	
現代詩作品展残金	0	第21回 現代詩作品展
年刊詩集残金	37,940	平成24年分
雑収入	1,000	年刊詩集売り上げ
計	838,775	

### ● 収 入 781,477

(単位:円)

416,477	繰越金
363,000	3,000円×121名(現会員)
0	
0	
2,000	年刊詩集売り上げ見込み
781,477	

### ● 支 出 422,298

(単位:円)

会報印刷費	176,450	279号～283号
名簿印刷費	8,085	
通 信 費	95,512	会報送料、幹事改選ハガキ 総会出欠確認ハガキ 封筒、宛名ラベル、その他
秋の詩祭	30,000	講師(佐久間隆史さん)謝礼
会 議 費	30,000	幹事活動費(3,000円)×10人
年刊詩集補助	0	
現代詩作品展	76,581	第21回 現代詩作品展 案内ハガキ、出欠確認ハ ガキ、ポスター ゲスト謝礼(40,000円) (三角みづ紀さん、蛭子健 太郎さん) その他(送料、補助)
シンポジウム	0	
総会関係費	5,670	前橋テルサ会場費(平成24年)
印 電	0	
諸 雑 費	0	
予 備 費	0	
計	422,298	

### ● 支 出 781,477

(単位:円)

177,000	5号分/年
8,085	
100,000	
34,000	講師(田中武さん)謝礼 講師懇親会費
30,000	幹事活動費(3,000円)×10人
0	
80,000	第22回 現代詩作品展
0	
6,000	
0	
0	
346,392	
781,477	支出合計

収入合計 838,775円 - 支出合計 422,298円 = 差引残高 416,477円

次年度繰越金 416,477円

【講師作品】 田中 武

## 物語の始まり

三時になるとウグイスが鳴いた

四時にはホトトギス

夏が来て 秋になっても あられ雪が木橋で跳ねても

ウグイスは三時 ホトトギスは四時

ノゴマは五時に鳴くのだ

そうして

夕暮れは水楢や朴の葉を従えてやってきた

世界は縫い目もなく丸かった

鳥時計が一つどこかに吊されていて

少年がただ一人で

古い納屋を相手にピンポンをしている

限りのないラリーを

辛抱強い納屋は

錆びだらけのトタン屋根をうねらせて返しつづけた

真つ黒な味噌樽や 鼠取りの金網籠が

その度にがたがたと土間を転げ回った

ある日 少年が

傍らの榎の木に訊ねた

ごろごろという向こうの音は何？

榎の木は返辞をしない 聞こえない振りで

葉鶏頭は黙って小首を傾げた

あの音は

もうだいたい以前からしていたのだ

誰だって知っている 少年でさえなければ

世界が崩壊する音だ

それでも六時にはシジユウカラが鳴いた

だしぬけに天の一角がめくれ

眩しい光が 少年の手足を打ち叩いた

ウグイスが何時に鳴くのか測りがたい世界で 物語が始まった

ようやく解放された納屋が

へなへなと地に頼れたことはもう誰も気にしなかった

(「雑草屋」から)

## 笹折り

小さな渦をいだいた山の斜面で母と子供は……

明るい外光の中では笹の葉はみなしろい光りの筋をもっていた

風にとぎときゆれていた

だれもかれも口をつぐみ

午後の山には色うすい時間のまだらふがしずかにうつっていた

笹を折る指の痛さに心づくたびに

よるべない孤独な心の

いじらしいほどの人恋しさの

無籍の笹は胸に返ってくるのであった

そのたびごと

子供は母の

母は子供の

名を呼ぶのであった

ある時の母の答えはずっと離れた繁みの中で聞こえる  
ある時の子供の返事は思いがけない身近な藪の中から  
かん高い笛をともなつて聞こえるのであった

笛は遠くでひとつになり重たい掌を静かに合わせるように消えた

いく度目か母が子供の名を呼んだとき

子供の声はかすかであった

とある繁みの中で母の持つ大きな笹の束は風に吹かれていた

子供を探してのびあがった肩のあたりに

濁の水がしろくひかっていた

〔茅原忌〕から

## 湖の家

または食事

家族への憎悪にはさだかな理由はない。風ぎわたる湖の夕影のよ  
うな家で、鮫鱈を食う父を見よ。鶏骨をしゃぶる妹を見よ。ふろふ  
きを囓る母を見よ。

長大な生き物が、水面下をゆるゆるくねっていく、それゆえにいっ  
そう静かな湖面へ、だしぬけにただひとつきらめき立つ波頭、憎悪  
とはそれだ。

祖母は歯ぐきでなおうす揚げを銜え、赤子はうつうつするめを囓  
む。妻は汗を掻いて、万引きのようにすばやく箸をあやつる。旋毛  
のかたちも似た愛すべき家族、あたたかい和合のけはいが両脇を  
団子のように埋める。

私は一家の主なる養い手で、そのことにかくべつの異存はないの  
だ。たとえ客齋が私の気質だとしても。

しかし、ここからは見えない湖の、水のおもみがるかに伝わって  
くる家で、ものを食う口に囲まれる、そのときの私には背中がない。

血縁のような沼縄のゆれつづく闇。憎悪とはそれだ。

思いつめてはたと箸を置くと、訝しげに問いかけるだれかれの目  
へ、私は、さざなみのようにやさしく、含差に似た微笑を返す。

〔茅原忌〕から

## 小さな土地

人には秘密だが、私は内腿のように小さな、隠れた土地を持って  
いる。土は柔らかくて深い。とても深い。星空に似た地所である。  
自分と、自分以外の何者かを埋める余地が、そこにはある。そのこ  
とは私が生きていく上で非常に大事だ。

昼間はできるだけ静かに町を歩く。ひとと目が合えば目をそむけ  
る。はみ出し者の私が、世間に面をさらして、道々のどんな耳こす  
りや嫌がらせにも平気だ。いつかかれらは埋められる。その思いだ  
けで、私は倅せなのだ。

誰も気付かないが、私の家族や隣人たちは、じつは私がひそかに  
埋めた死人なのだ。滑稽なことだが、頑固な父は三たびも埋められ  
た。大きな軍鶏の足とともに。死人とならば、私はかなりうまくやっ  
ていける。

夕暮れる辻にたたずんで、私が夢見るのは、行き交う人がすべて、  
私の死人となる日だ。さして広くもないこの町の、住人を残らず埋  
め終えて、顔を上げればかすかな月が登るようだ。かなしみのよう  
に深い小さな、土地の向こうに懸けられた、私の微笑にちがいない。

〔旅程にない場所〕から

## 賢治が見ていた

〈宮沢賢治〉と、かつて呼ばれた男を見かけたのは、〈女〉に逢いに行く電車の中であった。僕の十代が終ろうとしていた。

穏やかに田舎びた横顔を暮れ方の光りにさらして、窓外に目をやっている男は、まるで、全集のグラビアから切り抜いてきたようにみえる。目の先で十月の畦道が、巨大な半格子のように回転していた。

賢治がここで何をしている。僕は唐突に童話「カイロ団長」を思い出した。それが初めて触れた彼の作物だったから。それからもう一つついでに母のことを思い浮かべた。それが母へ読んでやった唯一の物語だった。

その晩のうちに、ぼくがふたたび賢治に出逢ったのは、もう偶然とはいえない。場末のヌード劇場で、僕の〈女〉はそこにいるのだ。プリオシン海岸の凝灰岩ともおほしい、かぶりつきに身を乗り出して、かれが熱心に見上げていたのは、青いトマトだったのか、それとも萎びたじゃがいもだったのか。

「カイロ団長」は母には不評だった。サーカス団の悲しい恋物語などではないのだから。二年後に、母は死んだ。まじめくさっておとぎ話などを読んでいる末っ子を、どう思っていたのだろうか。

だが、それどころではなかった。僕の幼さへ〈この世〉が殺到してきていた。賢治が見つけていたもの、異なる性の向こう側で、母に出逢うのはまだまだ先のことだった。

〔驟雨の食卓〕から

## 雑草屋

雑草という草はないというけれど、ぼくならこう言う、雑草のほかに草はない、と。雑草は命の基本なのだから。

鳥でぼくはときどき雑草屋というものになる。茫漠と草の生えた野面に縄を張って、幾つも幾つもの区画を作る。そしてそこにあるものを商う。穂のあるもの、ぎざぎざのもの、広く柔らかなもの、棘のあるもの、花をつけたもの、はやばやと生えているもの。仕切りの内も仕切りの外もすべて同様の草。

原っぱに立つて、  
さて、イカガミの雑草屋でござい、と、こう言う。その時風がど  
うと吹く。

イカガミとは何のこと、と聞くだろうが、ぼくにも分からない。いかかわしいのイカじゃあないが、鑑かがみになれるような性質たちでもない。口滑りの良さで使うわけだが、

さて、イカガミの雑草屋でござい、と、そう言う。  
応と答え、わつと囁し立てるものがあるかどうか。

そこでズボンのごみを叩き、空咳をする。雲を眺め、縄のゆがみを直し、茂みに隠れて立ち小便もする。手帖を取り出して、仕舞う。また取り出す。足踏みをする。頬を膨らます。それからまた、雑草屋でございと声を張り上げる。することはじつに際限もない。

三日も経てば縄を外し、「完売だ」と、野へ向けて大声で呼ばれる。その時、風は一瞬しんとしてから、ふいと雑草を押し倒す。

で、誰が買ったんだ、と聞くだろうが、教えない。商売上の秘密、と言うわけじゃない。このことについて語れる言葉がどうにも見つけられないからだ。

〔雑草屋〕から

## 『そして9月に』

## 早川聰君追悼に寄せて

狩野 務

暑い夏が過ぎて、我が家の周りも虫たちの賑やかな声が聞こえる季節となった。

そんな中、親友の早川聰君が亡くなったとの知らせがあった。

若し、青春という季節があったとしたら、僕と彼はその時期に出合った。

「サマルカンド」や「ラティメリア」という詩誌を二人で編集し、同年代の仲間たちと一緒に、とても楽しい時間を過ごす事ができたのも、早川君の手柄が多くの人を集めたのだと思う。

僕は人見知りで、恥ずかしがり屋でそんな僕にとつて彼は、輝いて見えた、僕は詩を通して貴重な仲間を得ることができたのも、早川君を通して生きがいを手に入れることで、どんなに救われた事だろう。

『そして9月に』は彼の詩集の題である。そして、9月に彼は旅だつてしまった。

現実と夢は、一見反するように見える。

しかし、夢のように過ぎるこの世は、若しかしたら夢の続きであり、現実の一コマは人の心の中で永遠になるような気がする。人は記憶の中で永遠に死なない。現実の世界で記憶として生き続ける。彼から受けた輝いた時

間は永遠に僕の中で生き続けている。

群馬詩人クラブの中でも鬼籍に入られた方々がおられる。小山和郎さんや新井頼子さん達が若しかしたら、天国で早川君と詩の話をしているのではないかと思う。

早川君とは二十代の頃、詩の集まりで出会った。職場と彼の家が近いことや詩の話で彼の家によく寄らせてもらった。

彼は両親と妹に囲まれて幸せそうであった。ここで、彼と一緒に編集した詩誌について話してみたい。「サマルカンド」という詩誌はシルクロードの青の都とよばれた美しい中央アジアの都市からとつた名前である。

そんな行つたことも見たこともない都市であったが、何故、サマルカンドだったのだろう。たぶん、遠いシルクロードの夢のような都市を題にすることで、まだ見ぬ夢を紡ごうとしたのかもしれない。

「ラティメリア」は生きた化石と言われるシーラカンスの別名である。

そんな面白い題を付けて、詩の活動を続けてきた。しかし、詩誌を継続するのはなかなか難しい。締め切りに原稿が滞つたり、詩から離れていく仲間がいると、どうもしっくりいかなくなるのである。そして、家庭や仕事を理由に仲間達も離れていったように思う。

青春という時期があつたとしたら、正にこの頃の事が妙にしっくりくるのである。

一度だけ、同じ世代の詩人とマンガ家たちで「詩」と「マンガ」のコラボレーションを

やつたことがある。「詩人はよくない。マンガもよくない。」という変わった題の本を作成した。詩とマンガはそれぞれマッチしたものを後付で同じページにして一つの詩に一つのイラストのようにまとめた。後で気づいたのであるが、なかなか詩とイラストがマッチして成功であつたように思う。

その時は、どういう訳か群馬テレビの取材もあつて和氣藹々といったところであつた。

その時に確か、詩の原稿を早川君がワープロで打つたものとイラストを合成して製本は業者に発注したような気がする。その頃のワープロはギザギザの文字で、それなりに機会的ではあつたが、手づくりの本のような感じになつた。

本を造る作業は、とても魅力的であつた。新鮮であつたと言つたらいいのかもしれない。早川君の家族もとても暖かく僕を迎え入れてくれた。いまでも、あの家のあの部屋に「こんにちは。」と入つて行けそうな気がする。早川君が笑顔で迎え入れてくれるような。しかし、もうそれは現実にはできない話である。時は、知らない間に過ぎ去つてしまつたけれど、僕の記憶の中にはあの路地をはいつて、本当に小さな公園の近くにあつたあの家までいつでも飛んで行けそうな気がする。早川君、またいつか、詩を語り合える時がくるその時まで、さようなら。そして、安らかにお眠りください。

以上

書評

## 自著を語る

### 文芸・映画評論集『影と飛沫』

(詩的現代叢書2)

愛敬浩 一

小説論中心の評論集をまとめたいと考え、瞬く間に十年が過ぎてしまった。詩も評論も書いて来た。同じように、小説や映画を対象とした評論を書きたいと思っていたが、その舞台がなかなかなかった。なければ、そういう場所を作るしかないのだが、そのためにも時間が必要になった。

だいいち、もはや文芸批評など誰も見向きもしない時代になってしまっていた。あとがきにも書いたが、「今では評論集そのものをもほとんど見かけない。研究書のふりをしたり、読書論のふりをしている。いやいや、そういう方向へと転換しないと生き残れないのである」。文芸評論や映画評論などというものが成立する(場)それじたいがなくなってしまうのである。その意味で、私の書く文章は雑文であり、私的なノートでしかないという諦めがある。

冒頭には、小田実の最後の長編小説『河』の第一巻を論じた評論を掲げ、二番目に黒井千次の『羽根と翼』論を並べたが、何人かからいただいた葉書の感想をみると、ずいぶんマイナーな作家を取り上げましたね、というものであった。私としては精一杯に流行に目

配りしたつもりであったが、改めて、今、自分自身がどういふところにいるのかが分かったような気がしている。三島由紀夫のエンターテインメント系の作品を扱ったものなど、自分ではかなり無理したような思いだったが、今でも三島由紀夫を読んでいる人がいるんだ、すねというような挨拶も受けた。

本当は、まずこれを読んでいたきたいと思つた戸石泰一論なども、ただ「知らない作家」ということで終わってしまった。太宰治は読んだとしても、わざわざ、その弟子まで相手にする必要はなからうかということであろうか。戸石泰一が苦闘の果てにようやくたどりついた小説世界に、私は襟を正したい思いである。

遠丸立の批評のありようは、私の見習うべき姿でもある。何かについて論ずるというのではなく、批評それじたいとして(批評)を成り立たせた批評家は何人もいないが、遠丸立は間違いなく、その一人である。ここでは、扱うことができなかつたが、秋山駿などの批評も典型的なものであろう。草森紳一について私が触れているのも、実はそういう文脈なのである。草森紳一が、自ら書くものを(雑文)と呼ぶしかないものだという認識に至るまでの歩みも、一つの苦闘のように思う。草森紳一は、何かを論ずるために文章を書いたのではない。彼もまた、ただ自分に出会うために読み、書き続けたのである。(雑文)というには、余りに純粋な行爲かもしれない。

## 佐伯圭詩集

### 『ゴッタ』について

井上敬二

佐伯圭氏とは長い付き合いだ。「巻頭詩、巻末詩、あとがき、その他」のなかの「ひとめのあとがき」にこの詩集の作品は「夜明け」「サマルカンド」「undo」「東国」に発表されたものだということである。この詩誌の何れにも私も参加しており、同じ場の空気で息をしていたということだ。そして佐伯圭氏は「サマルカンド」の存在が大きかつたと語っている。二十代の若者が集い行つていた詩誌は、私にも大きな影響をもたらしたものだ。

詩集「ゴッタ」は七つの小冊子を合わせた作りになっている。「笑」「童」「情」「海」「時」「世」それから最初に触れた「巻頭詩、巻末詩、あとがき、その他」である。さらにその巻末に、出版の経緯が記されている。故小山和郎氏のところで出版予定であったこと。「ひとめのあとがき」は、2007.9月とされている。「ふたつめのあとがき」によると、詩集のスタイルを考え直し、七つの小詩集をまとめたかたちにしたとしている。作者から直接耳にしたところ、この形式は「サマルカンド」を意識したものである、とのことだった。直ぐに私は納得がいった。懐かしさがそのかたちに溢れていた。

佐伯氏も私もしかり、随分と時を経てしまった感慨がある。取り返しのない貴重なものを喪失してきたに違いない。「時」——25時——より／ここにはもう何もない／／反乱の最後の抵抗が鎮圧された報告が／たつた今 入ったところだ／略／俺たちを救うものもないし／俺たちが許すべき相手もない／略／知らず知らずのうちにほくちちも／目を伏せがちに歩いている／まるでほくらのかか／永遠に欠け落ちてしまったかのように／略／ヘルグラスを抜いたところに／別の種をまいてもすぐ枯れてしまう／ヘルグラスの根の出す毒が／土を汚しているのだ／／だが俺は／次に来る者たちのために／何度でも／種をまく／ 佐伯圭氏の根底を成しているものだと思う。特に何度でも種をまくというのは、聖職者としての部分と重なっているのに違いない。「海」——海の夜——より／ボロ布だと思っていた それ／羽毛を持つ 多分鳥の屍の／波に漂う姿だった／丸い胴からは／片側の翼が 力なく伸ばされ／もう一方は／折り取られているのか／胴の下に垂れさがってでもいるのか／ここからは見えない／略／揺れている傷口のあちこちに／夜の海の／光る虫たちが群がり／空にあるはずのない／にせもの星座を形作っている／略／ただ その形を見つめていた／いつまでも／この小さな港に停泊していたい／そんなわたしの迷いを抱いて／海の／夜は深まっていく／

こんな妖艶な作品がゴツ煮のなかにある。

## セザンヌの精神から 詩作と詩論を汲み上げる人

鈴木比佐雄

片山壹晴詩集・評論集「セザンヌの言葉  
—わが里の「気層」から」に寄せて

片山壹晴さんは、セザンヌに魅せられてその優れた絵画を生み出した芸術精神を探求してきた。またそんな芸術精神と宮沢賢治などの詩人の詩的精神と類似性について思いを巡らし、また詩の実作も故郷の風景を受け止めて書き続けてきた。今回刊行した詩集・評論集は、三冊目の詩集でありながら、初めての評論集でもある。詩集は既に二〇〇四年に「刻みのない時間」、二〇〇六年に「人格のある鴉」を刊行している。その他の著書としては講義録「個」と「企業」——人格との関係をめぐって」がある。

本書には、詩集「気層」と評論集「見るもの感じるもの」の二冊分が収録されている。詩集「気層」五章に分けられている。一章「気層」十篇は、春の詩「気層」から始まり、詩「冬に入るまえ」で終わるように四季の時間が流れている。冒頭の詩「気層」には、片山さんの垂直思考的な感受性の特長がよく現れている。「気層」の一連目を引用する。「匂いある春の空気よ／密なる地層の空気よ／新たな生を迎え／ムスカリの澄んだ色のように／気層は光を澄ませ／天を仰ぐものたちが喉を震わす」(詩「気層」の一連目)

この詩の中に現れている地上から天まで続く空気層を一気に感受してしまい、その「気層」の美しさを賛美する。そしてそこに生かされている「天を仰ぐものたち」の感謝の念を伝えていく。匂やかな春の空気感や清潔な青のイメージがよく表現されている。この詩「気層」には、片山さんの思想や世界観が込められているに違いない。無を見詰めるながら在ることの切実さを詩に刻んでいくことで、この世界に存在する自然や事物が片山さんの内面に憑依してくる時間を記述して、そこで感じた思いを率直に語りだそうとする。五章までの詩四十二篇によって片山さんの詩が、存在論的な視野を持ちながらも、天地人のような重層的な視線の魅力が読み取れる。

今回の詩集の後の評論集「見るもの感じるもの」は四章に分けられる。一章「見るもの感じるもの」は「セザンヌの言葉、その芸術の奥へ」だけで、原稿用紙換算で百枚以上の労作だ。この評論は、序と八章から成り立っている。この序文はフランスの哲学者のモーリス・メルロ＝ポンティの引用文から始まり、この評論の見取り図が理解できる。セザンヌの芸術の理解にメルロ＝ポンティの解釈から刺激を受けたことを暗示している。メルロ＝ポンティは、近代哲学の二元論を克服しようとして試みたフッサールの現象学を「意識」の視点だけでなく、それを支える「身体」の観点からも考察した。そしてその両方が浸透しあった「心身合一」であるような「両義的な哲学」を生み出した。片山さんは現象学が「厳



「密学」を目指したようにセザンヌが求めた「普遍性の強さ」の秘密に肉薄していく。その秘密を解き明かすためにメルロ・ポンティの「両義的な哲学」の基礎となる「心身合一」の場からの記述とセザンヌの「気質」からの表現行為が類似していることを片山さんは発見している。そんな片山さんの芸術精神の格闘を見出していくスリリంగాな読書体験が本書の魅力だろう。

### 祈りはエスプリの詩窓から遍く空へ

—「せつせつせ」は大師の背中から戯れる—  
故 新井穎子さんの「うしろの月」から  
「まえの月」を掲げて

森 郁男

私の手に「黄金バット」の五十円切手が三枚ある。私が新井穎子さんに謹呈させていただいた幻の長編紙芝居『猫三味線』（DVD）への礼状に添えられていたものだ。

日付は二〇〇六年九月二十七日。礼状には私への依頼として同年九月上旬に宮崎県、延岡市に在る最後の日向琵琶盲僧、永田法順師のお寺である浄満寺が竜巻の直撃被害を受けた事に対するお見舞いも同封されていた。

永田法順師については、穎子さんが「語り物」に関心を寄せていた事を知り、私が同年三月に穎子さんに『永田法順全集（CD、DVD）』を謹呈済みであった。

「語り物」は、歌・唄・謡のように分かれるが、琵琶歌、瞽女唄、浪曲、説経節、節談

説教等々の流れは、声明を源流としていると言われている。

嘗ては身近に「語り物」があり、祖々への日々の祈りが幼子の心奥に心地良く刻まれた時代でもあった。

瞽女さんが季節の風に誘われるように、かの地を訪れ、村人は三味線の音色と瞽女さんが唄う段物語りに身を乗り出して聞き入った。旅回りの一座の舞台や浪曲師の白声がラジオから三つ子の魂を揺さ振っていた。

祈りと悟りを絵解きで語り、地獄から極楽への救いを解いた六道地獄絵、親鸞聖人の教えを説いた節談説教等々、説教者は声音を礎に言葉の魔術師の如く時代を駆け抜けた。

浪曲、講談、落語に魅了された穎子さんが落とし話の心得を幼心に脳裏に刻み込んだとしても不思議では無い。

「せつせつせ」に掲載された作品のエスプリは、まさに「語り物」の世界に魅せられた穎子さんの言語魔術の妙である。

「せつせつせ」は「よいよいよい」への始動の言葉。回文のように行き来する言葉の世界は、再生を繰り返す御霊となって今生を照らし続ける。

富岡の空と風と雲。穎子さんは五感を超えて祖々の御霊を守り、先人の英知を学び、機知に溢れた言葉と線画を周到に放ち続けた。

五色の紙風船から金剛石まで自在に取り出す「妖花の詩窓」からは、微かに甘い蜜の香りがする。

二〇一一年十一月一日付けで穎子さんから

届いた「国土安寧萬霊供養和讃」の和讃譜が机上に並ぶ。「月二回、檀家寺での御詠歌・和讃（真言宗・豊山派）は続けております。」と認めてある。

祖々の姿と共に幼い穎子さんが弘法大師に背負われて戯れる姿が見える。

—大師の背中として「うしろの月」は、背中を回して「まえの月」。祈りの空は南無大師遍照金剛。—

### 野口武久詩集「野の道」

#### 生と死の根源を見すえて

久保田 穰

二〇一〇年三月、野口武久さんは七十四年の生涯を閉じた。その死は唐突だった。その死から三年余の時がたち、二〇一三年の夏の日、遺稿詩集と呼ぶべき『野の道』が思潮社から刊行された。全五十八篇の詩を収め、装幀は前橋出身の画家・作家の司修氏。

『野の道』とはこの詩集にふさわしいタイトルだが、収録作品を通奏低音のように流れているのは、一九四五年八月五日深夜「わずか一時間十五分で消えた」前橋の街であり、「火の海」の記憶である。「血の色をした燃える火の海は／私の胸の中でいつまでも消えない」と、「燃える満ち潮」の詩に書いた。

「胸の中にB29の焼夷弾で焼き尽くされた前橋の街の体験を秘めながら、野口さんは詩を書きつづけてきた。さらに「街が焼夷弾で焼かれた日／国民学校三年生だった少年は／

七十歳になりました」と、「小さな願い」の詩に書いてもいる。

さて詩集の表題の『野の道』のイメージは所収作品の多くに見られるが、「秋の道」の詩はより印象深い作品になっている。

「水の音がきこえる野の道／細いひとすじの乾いた道を／喪服の人達が向こうから帰ってくる／死んだ者は／二度と同じ道へはもどらない」(「秋の道」)

紙幅の関係で作品の引用が多くできないのだが、「桃の花が咲くと／今年も母は帰ってきた」(「幻の人」)、「墓地を買った」(「樹を植える」)、「沈みかけた夕陽に／木犀の花が散っている」(「木犀の花」)、「四月は新学期のはじまる月」(「梢の芽がふくらむように」)、「笹舟を追って／小さな川を下っていった」(「夏の道」)、「母の病院へは／古墳の丘の脇を通ると近道だった」(「古墳の道」)など、作品の書きはじめの部分の引用だが、難解で分からない、奇を衒うような表現はひとつもない。季節の移ろい、作者への行為が淡々と描かれ、その日常が平明な言葉で書きとめられている。

詩集『野の道』を読み、私は「道」という言葉が多用され、その言葉が詩語になり、詩の中で重要なはたらきをしていることに気づくのだ。先に引用した詩「秋の道」もそうなのだが、次の詩にも関わってくる。

「麦畑のつづく道／歩いて行くのが「生」であり／死んで帰ってくるのも／「生」なのかと思ひながら」(「出征の日」)

〈勤めの行き帰りに歩いた野の道も／麦畑の向こうに広がっていた／菜の花畑も／季節の風の匂いが流れていた〉(「道」)

野口武久さんは街を、樹を、花々を、ひとを、身辺をとりまく事物たちを描いた。それぞれの生命の生と死を描いた。そこに野口武久の生の根源と思想の大本をみるのだった。

イベント報告

名曲茶房

あすなろと崔華國

志村喜代子

「あすなろ」復活(2013年5月26日プレオープン・6月9日オープン)の興奮さめやらぬ7月13日(土)から「名曲茶房あすなろと崔華國」展が、群馬県立土屋文明記念文学館にて開催された。

「あすなろの崔華國」、「崔華國のあすなろ」ことさら違和はない。けれどもこれでは「あすなろ」も「崔華國」も歴史に埋没するばかりだ。「あすなろ」と「崔華國」は「あすなろ」そして「崔華國」を牽引し合うこの世界を、はつきりと確認し、その展開のスケール・精神性を立証した企画展であると言えよう。

会場入口、天井から吊るされた垂れ幕(「流離譚」)に迎えられる。韓国の東南部地方伝承の諺も崔華國にかかれれば、この味わいである。自筆ハンゲルの次に(ふるさとに)さだめありや/なさけかよえば/そこぞふるさと)。この展覧を物語ってやまない思いに向き合わ

され立ち止まる。すると、噴きこぼれるような、たとえようもない笑みが深々と待っていてくれる。

右手に広がる錚々たる年譜の下には「朝鮮詩集」。くさつと刺される傷みを呑んでまとも進めば、心をわしづかむ文字が立ち上がっている。「……大の男が詩を嘔みながら嗚咽し、滂沱と涙する図を想像できようか。虐げられ踏み躪られた、被圧迫民族の悲惨さを経験されずしては、想像に絶する世界であろう。(「詩と嗚咽」より)。このエッセイで崔はこ

うも記す。「私にとって詩はいつも、かそけき嗚咽の悦楽を伴うものであった」と。この嗚咽を消化し、昇華することこそ詩人・崔華國と対峙できる一歩であると展示は教えてくれる。

正面壁面は、「ここに泉あり」に感動し高崎を拠点とする活動の始まりである。韓国慶尚北道慶州の素封家に生まれた崔は、十一歳までお尻にたれるほどの辮髪であったという。十四歳で父が急死。十七歳で渡日、開成中学編入に合格。二十歳で帰国、朝鮮民報社(社会部)入社。両班の慣例によって、崔は祖国で優遇された。二十四歳で再渡日。ジャーナリストとしての素養を日本新聞学院で学ぶ。太平洋戦争開戦は二十六歳、日本海軍新聞社横浜支局長。三十歳で終戦。祖国の開放を横浜で迎える。そして帰国。自編年譜には、当時の事情で日本に戻れず、と記され、大邱新聞社社会部長・論説委員とある。当時、李承晩政権の政策を批判、筆禍事件で数次投獄されている。三十五歳、朝鮮通信社・釜山支社

編集部長在職中に朝鮮動乱に遭遇。三十六歳（昭和26年）GHQの招聘で東京に。二年後産業貿易新聞東京本社・編集局客員となる。

祖国そして日本（世界）のおぞましい惨劇と激動の時代をジャーナリスト・崔華國はいかに超えたか。名曲茶房「あすなろ」開店は四十二歳。「日本のウイーン高崎 高崎の夢あすなろ」「郷土を美しい絵と詩と音楽で埋めましょう」をモットウに、群響への愛を群馬音楽センター建設運動と寄付金箱設置）。あすなろ報・生の音楽の夕べ・詩の朗読の夕べ等、次々と緩なす文化の糸を縦横に織り込む。その充実はさらに「詩人とつどう会」へ。

東京在住の詩人を一夕、神津荒船高原に招待し県内詩人との交流を図る。これまで崔華國の招聘で来高した中央詩壇の面々の揃い踏みであった。まばゆい壁面。中央部には燦然とH氏賞歴代受賞詩集63冊。第35回崔華國「猫談義」の光彩。七十三歳だった。

最終コーナーは（崔華國がもたらしたものの）。確かに画家・音楽家・詩人等を「あすなろ」は育てた。音楽センターや、音楽のまち高崎という有形無形の活力源も継承され、「あすなろ」は新生の奇跡をも遂げた。

「崔華國」は、すべてを超え晩年はオハイオに移住し、フィラデルフィアで眠っている。日韓に限らずアジア圏と協調し、五冊の詩集と味わい深いエッセイに大いなる愛の魂を横たえた「崔華國」は、（この愛のうたに「日本の詩」はいつか、どこかで真剣に応えねばならないだろう。（荒川洋治）という命題を、

永遠に突きつけていると思われる。

## 第十八回高崎ストリートライブ 「詩は眠らない」レポ

新井隆人

今回で十八回を迎えた高崎ストリートライブは、今年六月に再興したあすなろを会場に一ヶ月に亘る展示とふたつのイベントが実施された。プロデュースを手がけたのは関口将夫さんで、ほくは企画・運営をサポートした「ビジュアル・ポエトリイ展（視詩展）」（九月十四日～十月十三日）の出席者は、新井頴子・新井隆人・岸本美奈子・北爪満喜・國峰照子・関口将夫・田名部ひろし・支倉隆子・濱條智里・森郁男の十名で、日本各地から普段観る機会の少ないビジュアル詩作品四十余点が一堂に会した。特筆すべきは今年逝去した新井頴子さんの作品三点で、國峰照子さんの尽力により展示が叶ったのだが、今回の展覧会は、いわば新井さんの追悼展のような一面も持っていた。機知のある端然とした佇まいは、これまでの新井さんの作品と変わらず、このパトンはほくちがしつかりと引き継いでいかなければ、という思いを新たにしたい。

イベントの第一弾は「ことばのパフォーマンス」（九月二二日）で、詩人の朗読をメインとしていた。出演者は新井啓子・北爪満喜・くぼんぼん（新井隆人+國崎理嘉）関口将夫・橋上・ちゅうサンの六組。北爪さんは前橋出身、東京在住の詩人で、今年三月には前橋で

詩と写真の展覧会、朗読会を開催した。國崎さんは前橋出身・在住で、パリで十年間ガムラン音楽の修行を積まれた方。橘さんは千葉県在住の詩人で、今年三月前橋での朗読会とオープンマイクに参加していただいた。今年ヴェネツィアビエンナーレ日本館（代表作家・田中功起）のプロジェクトに参加、八月にはスロヴェニアの国際詩祭に招聘されるなど、精力的に活動している。パントマイムのちゅうサンは北爪さんの朗読とコラボしたほか、単独でトリを務めて観客の爆笑を誘った。多彩な表現は、ポエトリイ・リーディングの面白さを改めて感じさせてくれた。

イベントの第二弾は「ことばのライブ」（九月二九日）。てあしくちびるがコディネットをした、言葉に重きを置いたミュージシャン等四組によるライブ。DJacidさんは、スポークン・ワーズという群馬ではほとんど見る機会のないスタイル。ハハノシキユウさんは、MCバトル（即興ラップ対決）で鍛えたラップ。てあしくちびるは、歌とラップを組み合わせたアコースティック・ユニット。松浦健太さんは、メッセージ性の強いギターの弾き語り。いずれも群馬県外からの参加で、ポエトリイ・リーディングの可能性を大きく広げる、刺激的なパフォーマンスを繰り広げた。このような挑戦的、意欲的な試みがあすなろで開催されたことに意義は大きい。詩人の観客が少なかつたことに危機感を覚えた反面、若者を中心に多くの方が足を運んでくださったことは、大きな励みになった。

# 『群馬年刊詩集第二十六集』

販売のご案内

群馬詩人クラブ刊行『群馬年刊詩集第三十六集』を次の要領で販売します。

## 内容

詩作品 六十八篇

追悼 栗原道子

新井穎子

文・「花さき山のおねえちゃんに感謝をこめて」

金井裕美子

早川 聰

文・「しらじらしい風に抗い」

井上英明

表紙装画 狩野 務

## 発行

〒373-0806 群馬県太田市龍舞町五四六七  
井上英明方 群馬詩人クラブ幹事会

## 印刷

三協印刷

## 頒布

二〇〇〇円 会員は一〇〇〇円  
いずれも郵送費は別料金となります。

※問い合わせ及び購入希望は幹事会へご連絡下さい。

(TEL〇二七六一四五―五五一四)

## 受贈詩誌御礼

\*御惠贈感謝致します。

野口武久詩集『野の道』

野口優

萩原朔太郎研究会会報77

季刊「榛名団」8

榛名まほろば出版

季刊「詩的現代」6号

詩的現代の会

「宇宙」5

宇宙の会

「岡田刀水士と清水房之丞」

愛敬浩一

「朔太郎が愛した利根川を行く」

木村和夫

個人詩誌「河」28

柳沢幸雄

詩集「アリアの詩集」(復刻版)

柳沢幸雄

「北海道詩集60」

北海道詩人協会

「山形の詩アンソロジー・2013」山形県詩人会

詩集「秋の旅」

外村文象

詩集「スイレン科スイレン属」

大川映子

詩集「晴れた青空に」

畑山隆幸

大衆文芸「ムジカ」創刊準備号

丘のうえ工房ムジカ

北海道詩人135

北海道詩人協会

千葉県詩人クラブ会報223

北海道詩人協会

大分県詩人協会会報138

北海道詩人協会

福井県詩人懇話会会報83

北海道詩人協会

栃木県現代詩人会会報66

北海道詩人協会

埼玉詩人会会報

北海道詩人協会

「いちご通信」7

大分県詩人連盟

岐阜県詩人会会報 創刊号

大分県詩人連盟

関西詩人協会会報71

大分県詩人連盟

中日詩人会会報178

大分県詩人連盟

詩と童話「タラの木」21

タラの木文学会

涙るい工房「裸心版」

こまつかん

(十月十五日現在 敬称略)

(十月十五日現在 敬称略)

## 編集後記

○暑かったり寒かったり気紛れ季節もやっと山並みだけでなく町の中にも紅葉を誘っており、思い思いの秋が目の前にあります。

群馬詩人クラブも創立から五十六年が過ぎようとしています。先達の築いてこられた歴史の重みを感じずにはおれません。その一端を会報二七五号を出発に二八四号まで担わせていただきました。それもこれも皆様のご協力があったる事でした。公私共にお忙しい最中に原稿依頼をいたし、貴重な時間をお割き下され、ありがとうございます。尚、今号には、千葉県の鈴木比佐雄氏、高崎市の國峰照子氏の御尽力をお借りし、東京都の森郁男氏に書評をお書き戴きました。厚くお礼を申し上げます。

○十一月二十三日の総会を持ちまして、代表井上英明の現幹事会は任期を終了いたします。幹事一同、二年間のご協力を深謝申し上げます。次期幹事会の出発でもある訳で、新幹事の皆様に応援、協力のほどよろしくお願い致します。

○「秋の詩祭」の講師は群馬に馴染み深い田中武氏です。どんな話が飛び出すやら、ぜひ、前橋テルサに足をお運び下さい (堀江拜)